

評価の実際

ここでは、本時（第5時）に行った〔書く能力〕①②,〔言語についての知識・理解・技能〕①②の評価の実際について、生徒の作品なども例示しながら述べる。

本単元の評価は、次の表1のような計画で行った。（ 囲みの部分は本時の評価）

表1 単元「文章に図表を組み合わせて『私』の説明文を読みやすくして印象的なものに仕上げよう」における評価計画

観点 時間	国語への 関心・意欲・態度①	書く能力①	書く能力②	言語についての 知識・理解・技能①	言語についての 知識・理解・技能②
1	○ 【ワークシート①】 【ワークシート②】 【観察】				
2		○ 【ワークシート③】 【付箋】			
3	○ 【ワークシート④】 【観察】			○ 【ワークシート④】	○ 【ワークシート④】
4			○ 【ワークシート④】 【振り返りシート】		
5		○ 【ワークシート⑤】	○ 【ワークシート④】 【振り返りシート】 【ワークシート⑤】	○ 【ワークシート⑤】	○ 【ワークシート⑤】
総括	※第1時と第3時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」の場合は、学習の深まりや向上を考慮して、第3時の結果を単元の評価とする。なお、「A, C」「C, A」の場合は「B」とする。	※第2時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」の場合は、学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。なお、「A, C」「C, A」の場合は「B」とする。	※第4時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」の場合は、学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。なお、「A, C」「C, A」の場合は「B」とする。	※第3時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」の場合は、学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。なお、「A, C」「C, A」の場合は「B」とする。	
		※単元の評価は①と②の両方が（A）の場合を（A）、両方が（C）の場合を（C）とし、それ以外は（B）とする。		※単元の評価は①と②の両方が（A）の場合を（A）、両方が（C）の場合を（C）とし、それ以外は（B）とする。	

第5時の「書く能力」①②の評価の実際（表1の 囲みの部分）

「書く能力」①「伝えたいことが明確に伝わるように、材料を収集・分類・整理しながら、段落の役割を考えて文章を構成している」の評価については、第2時の材料を集めて分類し、書く材料を選び出して大体の構成を考える場面と、第5時の学習を終えた段階でワークシート⑤に清書した『私』の説明文の記述によって行った。第2時の指導に当たっては、自分を説明する材料を付箋に書き出すのが不十分だったり、大体の構成を考えるのが滞ったりしている生徒に対して、それぞれの生徒の日常生活から推測して例を挙げたり、学習の手引き⑤を参照させながら、付箋を貼る位置を変えて見せたりするなどの手立てをとり、段落の役割を意識して下書きができるようにした。

「書く能力」②「書いた文章を読み返し、文章と図表とが対応しているか、図表が文章の助けとなっているかなどを確かめ、読みやすく印象的な文章にしている」の評価については、第4時の推敲の場面と、第5時の学習を終えた段階でワークシート⑤に清書した『私』の説明文の記述を中心に、ワークシート④の下書き、振り返りシートを補完的な資料として行った。第4時の指導に当たっては、作品を交流して友達からもらった付箋を、振り返りシートに観点ごとにまとめる作業を生徒と一緒にして、改善点について具体例を示して推敲するように促した。

なお、「書く能力」①については第2時、「書く能力」②については第4時での評価を、それぞれその後の指導に生かすようにした。

第5時の「書く能力」①②については次のような目安で評価を行った。

	「書く能力」①	「書く能力」②
「おおむね満足できる」状況（B）	○図表と関連させて段落の役割が明確な構成で文章を書いている。	○文章と図表を対応させ、図表が文章の助けとなるようにしている。
「十分満足できる」状況（A）のキーワード	○図読に応じた「順序」 ○展開に応じた「指示の言葉」 ※少なくともどちらか1つが見られたら（A）	○「推敲した内容との対応」
「努力を要する」状況（C）と判断される生徒への手立て	→学習の手引き⑤やワークシート③を使って、双括弧で書くことを示し、分かりやすい構成で書くことを促す。	→ワークシート④、振り返りシート及びその他の学習資料を参照させ、具体的な改善点を示して書くように促す。

[書く能力] ①について具体的には、ワークシート⑤の記述によって以下のように評価した。

■ 「十分満足できる」状況（A）と評価した例

	<p style="text-align: right;">題名 私の頭の中</p> <p style="text-align: right;">名前</p>
<p>今の私の頭の中は以下の通りである。</p> <p>まず「部活」。吹奏楽部に入部した。入った半年程たった今でも、吹奏楽についてはまだまだ未知なことは多かった。勉強したり練習したりして先輩のように人の心に響く演奏が出来るようになりたい。また十月には九州マーチンコンテストに出場する。三年生の先輩と一緒に演奏、演技が出来るのもこれが最後だ。いいものにするためにも毎日練習をがんばっている。</p> <p>次に「趣味」。小さい頃から習っているピアノは、私が音楽を好きになったきっかけでもある。今度ある合唱コンクールでは伴奏をするつもりだ。とても難しく二曲も弾くので大変だが、クラスのみんなのためにも毎日練習に励んでいる。</p> <p>そして「勉強」。好きな教科は英語と国語と音楽である。得意ではないが授業はすごく楽しく面白。英語については、今度英検三級を受ける。自信はないががんばりたい。英語の暗唱大会にもエントリーした。きちんと文を覚え、校内予選を勝ちぬぎ県大会に出場したい。</p> <p>最後に「将来」。音楽関係の仕事に就きたいと考えている。そのためには今の努力が大切だ。</p>	

図1 「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒のワークシートの記述

図1の生徒は、第5時の学習を終えた段階でワークシート⑤に清書した『「私」の説明文』の記述内容を見ると、教科書の完成作品例を参考にして、円グラフを用い、自分の「頭の中」を占める関心事の割合を表している。段落構成も、まず、全体的なことを述べる段落を書き、次に円グラフの要素の順に、1つ1つの要素について詳しく説明している。最後の要素の説明に将来への展望を書き、現在の最も優先的な関心事の部活動との関連をもたせ、結びとしている。以上のこ

とから、この生徒は「図読に応じた順序」で段落を並べて書いていると判断し、「十分満足できる」状況（A）であると評価した。

■「おおむね満足できる」状況（B）と評価した例

	<p>題名 私のがんばっていること 名前</p>
<p>今私は、こんなことをがんばっている。</p> <p>まず「部活動」。私は、小学校のころからバドミントンをやっていたのでバドミントン部に入部した。練習はともまづいが、試合で勝てるように目標を立てそれを達成できるように、一生けんめい練習をがんばっている。</p> <p>次に「勉強」。中学生になると、テストがたくさんあってそれに順番もでる。勉強もだんだん難しくなってきたため、私は家での勉強をがんばっている。苦手な教科はいろいろあるが、テストでいい点数がとれるか心配である。</p> <p>最後に、「学校生活」のこと。ちがう学校の人もたくさんいるので、新しい友達もたくさんできた。先輩もでき、いろいろ大変だが、とても楽しくすごせている。これから先の学校生活もいろんなことがあると思うが、何事にもあきらめず、楽しく、じゅう突した学校生活をおくりたいと思う。</p>	

図2 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した生徒のワークシートの記述

図2の生徒は、第5時の学習を終えた段階でワークシート⑤に清書した『『私』の説明文』の記述内容を見ると、文章構成については教科書の完成作品例を参考にして書いている。最初に全体的なことを述べる段落を置き、「部活動」と「勉強」の2つの観点について述べ、最後にそれ以外の「学校生活」全般のことに言及してこれから先の展望を述べていて分かりやすい構成になっているが、レーダーチャートの指し示す値の違いとの関連については説明されていなかった。このことから、「図読に応じた順序」も、展開に応じた「指示の言葉」も満たしていないと判断し、「おおむね満足できる」状況（B）であると評価した。

円グラフの要素については、その割合の多いものから順に時計回りに書くので、図読の順に書くとは必然的に値の多い順に書くことになり、文章では、その値の違いに言及しなくても順序性を理解ができる。ところが、レーダーチャートにおいては必ずしも値の順に書くとは限らないこともあり、指し示す値の違いに言及する必要がでてくる。図2の生徒は、指導者のモデルのレーダーチャートと自分の書いたレーダーチャートの違いに気付かず、その指し示す値の違いに言及していないことに気付かなかったと考えられる。この生徒は、書写の能力にも長け、語彙も豊富で記述力も高いことから、グループでの推敲でも、よい点は多く指摘されたものの、改善点についてはほとんど出されることがなかった。その結果、推敲を深めることができずに清書に至っている。指導者が個別に関わり、教師のモデル(レーダーチャート)と対照させるなどして、推敲を深める手立てを取る必要があったと考えられる。

■ 「努力を要する」状況（C）と評価となりそうな生徒への対応

本時の学習において、「努力を要する」状況（C）となりそうな生徒に対しては、学習の手引き⑤「構成に強くなろう！」を提示して「二、説明的な文章の構成」の「1基本要素」と「2構成の型」を読ませ、生徒のワークシート③の付箋をその構成の型の双括型に応じて貼り変えて見せ、分かりやすい構成で書くことを促し、ほとんどの生徒を「おおむね満足できる」状況（B）とするように支援を行った。

■ 観点別評価結果の総括

評価結果を総括する際に、2つの評価結果が異なる場合には、1頁の表1に記したように、以下の①、②のようにした。

- ① 第2時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」となる場合は、生徒の学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。
- ② 第2時と第5時の評価結果が順に「A, C」「C, A」の場合は、いずれの場合においても「B」とする。

第2時は、大体の構成を考える段階であり、その後の下書き（第3時）やグループでの意見交流（第4時）を経て清書をするので、第5時における評価結果をより重視することとした。第2時においては、記録に残す評価として位置付けているが、同時に、生徒の状況に応じて適切な指導・支援を行うことで、第5時の学習活動の充実につなげたいとの意図もある。

[書く能力] ②についてはワークシート⑤の記述を中心にし、ワークシート④の下書きと推敲して加除修正した書き込みの状況、振り返りシートの記述などを補完的な資料として評価した。

■「十分満足できる」状況（A）と評価した例

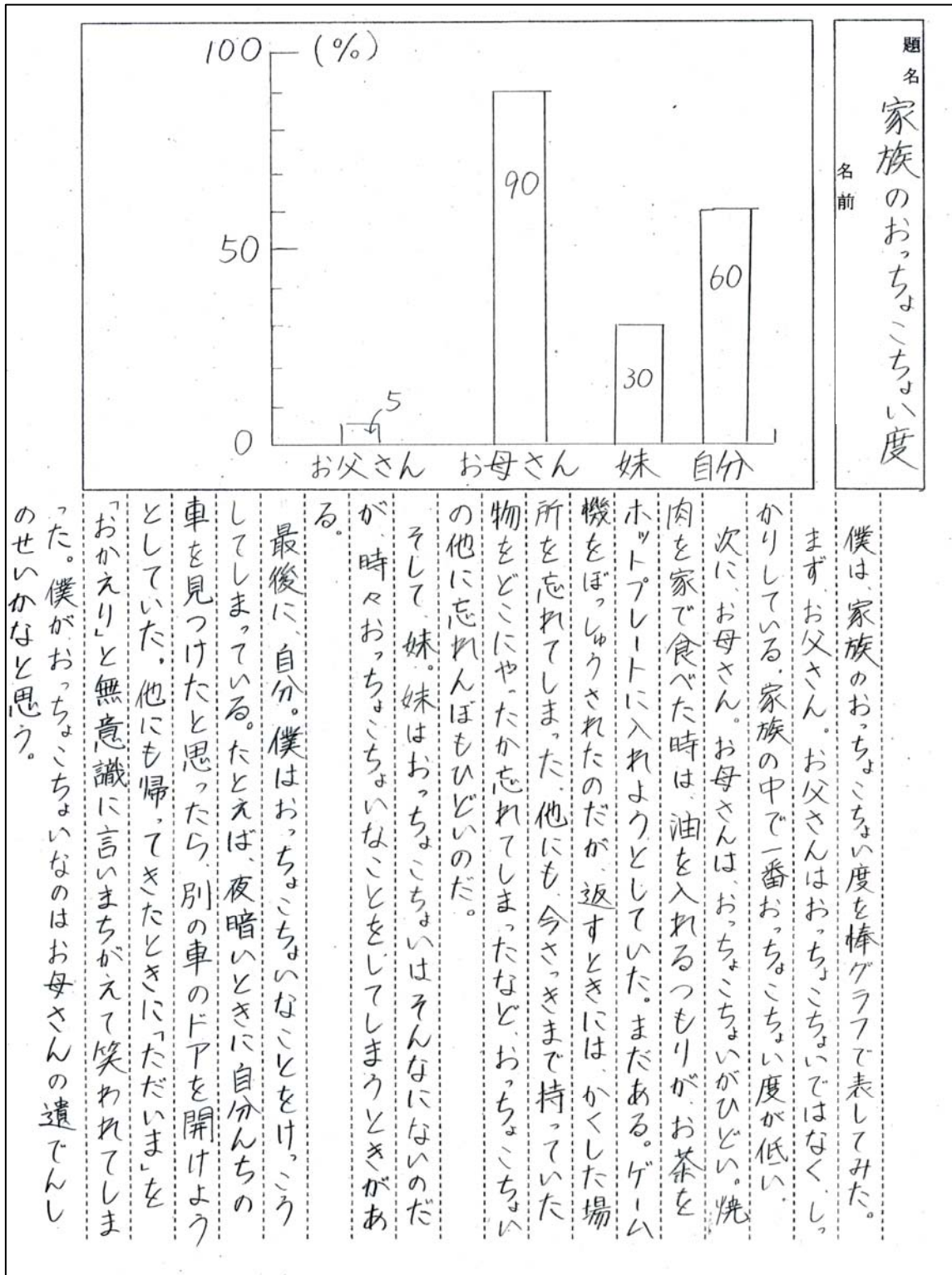


図3 「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒のワークシートの記述

図3の生徒は、「家族のおっちょこちょい度」を棒グラフで表現している。下書き（第2時）では、父親のおっちょこちょい度を10パーセント、自分のおっちょこちょい度を父親と母親のそれを足して2で割って50パーセントにしていたが、第4時のグループでの意見交流を通じた推敲の

段階で、友達から父親と母親のどちらに似ているかを尋ねられ、どちらかといえば母親似であることに思い至り、グラフの数値について、父親を5%に減らし、自分を60パーセントに増やす修正を行った。このことから、「推敲した内容との対応」で、読みやすく印象的な文章にしている状況と判断し、「十分満足できる」状況（A）と評価した。

■ 「おおむね満足できる」状況（B）と評価した例

	順位	好きなこと	題名 名前
	1	サッカー	
	2	香川選手	
	3	体育	
	4	青、緑	

今のほとんどの好きをよつことは、次のことである。
 まず、「サッカー」。最近、サッカーをやりたいという
 思いが強くなった。だから、部活では、サッカー部
 に入部した。小学校のころからサッカーをやっていたの
 で、だいたいは、分かった。この人後も、部活の人達
 とのつよに上達していきたいと思っ
 次に、「香川選手」。サッカー選手の中では、特に
 香川選手が好きだ。その選手を目標にして、かんは
 うつとがんばる。
 そして、「体育の授業」。学校の授業の中では、体育
 が一番好きだ。いろんな人な、楽しいうことかある。けと
 難しいことや、めんどうくさいこともある。でも、いつ
 しょにやる人と、楽しくやっていたい。
 最後に、「青、緑」。好きな色は、青と、緑であ
 る。見た目かさわやいで、明るいからだ。
 みなさんも好きなものを考えたらどうですか。

図4 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した生徒のワークシートの記述

図4の生徒は、「自分の好きなこと」をランキング表にまとめて説明をしている。下書き（第2時）では、材料をランキングに載せる段階で、それぞれ「好きなスポーツ」「好きな選手」「好きな教科」「好きな色」というようなカテゴリーの違いがあった。しかし、第4時のグループでの意

見交流を通じた推敲の段階で、このランキング表について「どういう順番か」と友達に尋ねられて、「紹介したい順番」であると答えることで自覚し、そのことを振り返り表に記述しているところから、この生徒の『『私』の説明文』は文章と図表が対応し、図表が文章の助けとなるようにしている状況にあると判断し、「おおむね満足できる」状況（B）と評価した。

■ 「努力を要する」状況（C）と評価となりそうな生徒への対応

本時の学習において、「努力を要する」状況（C）となりそうな生徒に対しては、学習プリント等を参照させ、具体的な改善策を示して書くように促し、ほとんどの生徒を「おおむね満足できる」状況（B）とするように支援を行った。

■ 観点別評価結果の総括

評価結果を総括する際に、2つの評価結果が異なる場合には、1頁の表1に記したように、以下の①、②のようにした。

- ① 第4時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」となる場合は、生徒の学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。
- ② 第4時と第5時の評価結果が順に「A, C」「C, A」の場合は、いずれの場合においても「B」とする。

第4時ではグループ内で下書きを読み合い、意見交流をした後に推敲をする。第5時ではそれを基に、清書をするので、第5時における評価結果をより重視することとした。第4時においては、記録に残す評価として位置付けているが、同時に、生徒の状況に応じて適切な指導・支援を行うことで、第5時の学習活動の充実につなげたいとの意図もある。

第5時の「言語についての知識・理解・技能」①②の評価の実際（表1の 囲みの部分）

「言語についての知識・理解・技能」①「図表を説明するとき、指示語や接続語を工夫して使っている」と「言語についての知識・理解・技能」②「学年別漢字配当表に示されている漢字を適切に使って文章を書いている」の評価については、第3時の下書きの場面と、第5時の学習を終えた段階でワークシート⑤に清書した『私』の説明文の記述によって行った。

なお、第3時での評価を、その後の指導にそれぞれ生かすようにした。そこで、総括はワークシート⑤に清書した作品における評価を重み付けして行い、単元の評価とした。

第5時の「言語についての知識・理解・技能」①②における評価は、次のような目安で行った。

	「言語についての知識・理解・技能」①	「言語についての知識・理解・技能」②
「おおむね満足できる」状況（B）	○図表との関連を示す指示語や接続語を使って文章を書いている。	○学年別漢字配当表の漢字を適切に使って書いている。
「十分満足できる」状況（A）のキーワード	○「段落相互の関係に応じた指示語や接続語」	○「読みやすくするための常用漢字の使用」
「努力を要する」状況（C）と判断される生徒への手立て	→学習プリント「読むこと」①②を使って、指示語や接続語の働きを確認させ、適切な指示語や接続語を選んで書くように促す。	→漢字表記をすべき語句を指摘し、適切な表記を示すなどして、漢字を書くように促す。

「言語についての知識・理解・技能」①については、書くポイントの3に「順序を表す言葉や指し示す語句を使って書く」を明示し、学習プリント①②を活用して既習事項を確認したことで、ほとんどの生徒が少なくとも「おおむね満足できる」状況（B）とすることができた。

「言語についての知識・理解・技能」②についても、『私』の説明文を書くポイントの5に「漢字で書くべき語句は漢字で書く」と明示していたことと、第3時に下書きの段階でひらがなばかりで書いていたり、誤字脱字が多かったりした生徒であっても、第4時のグループでの意見交流を通じた推敲の段階で、友達から指摘を受けることでほとんどが改善されていった。このようにして、最終的に第5時の清書をする段階では、全ての生徒が誤字脱字をほとんど見落とすことなく清書することができ、全ての生徒を少なくとも「おおむね満足できる」状況（B）とすることができた。

なお、第3時の下書きの段階で、「努力を要する」状況（C）と判断した生徒に対しては、第4時でのグループでの意見交流の段階でも意識して個別指導を行い、交流で指摘されなかった指示語や接続語の使用及び誤記訂正については指摘して書き直すように指導した。

「十分満足できる」状況（A）と評価した例としては、図1、図2の生徒が挙げられる。

図1の生徒は、段落の初めに「まず」「次に」「そして」「最後に」を用いて図表の各要素について順序よく説明し、しかも、各段落の内容が、「部活動」「趣味」「勉強」「将来」をキーワードとして自然な展開（吹奏楽部での「部活動」という一番の関心事が、小さいころからの「趣味」のピ

アノに由来していて、学校での「勉強」も音楽の他、国語や英語が好きで、「将来」は音楽関係の仕事に就きたいと考えているので、「部活」も「趣味」も「勉強」も「将来」へ向けて努力することなのだ(と終結している)になっている。以上のことから、図表との関連だけでなく、「段落相互の関係に応じた指示語や接続語」を使っている状況と判断し、[言語についての知識・理解・技能]①について「十分満足できる」状況(A)と評価した。

また、図1の生徒はキーワードとなる「趣味」については、常用漢字を用いて漢字表記をして読みやすくしているので、[言語についての知識・理解・技能]②についても「十分満足できる」状況(A)と評価した。

図2の生徒は、段落の初めに「まず」「次に」「最後に」を用いて図表の各要素について時計回りに説明をしている。加えて、段落相互の関係が、「部活動」「勉強」それ以外の「学校生活」というように、中学校生活のカテゴリーとして3つの観点を定め、「最後に(中略)これから先の学校生活もいろんなことがあると思うが、何事にもあきらめず、楽しく、じゅう実した学校生活をおくりたいと思う」とまとめている。以上のことから、図表との関連だけでなく、「段落相互の関係に応じて指示語や接続語」を使っている状況と判断し、[言語についての知識・理解・技能]①について「十分満足できる」状況(A)と評価した。

また、図2の生徒は常用漢字を用いて「先輩」と表記して、読みやすくしているので[言語についての知識・理解・技能]②についても「十分満足できる」状況(A)と評価した。

図3の生徒は、段落の初めに「まず」「次に」「そして」「最後に」を用いて棒グラフの要素を左から順に説明している。加えて、段落相互の関係が、父、母、妹、自分の順に起承転結の構成(おっちょこちょい度最低の父とおっちょこちょい度最高の母をもつ子どもである自分たちは、妹はやや母親の影響があると思うが、自分はどうも母親の遺伝子の影響を強く受けておっちょこちょいのような)を成している。以上のことから、図表との関連だけでなく「段落相互の関係に応じた指示語や接続語」を使っている状況と判断し、「言語についての知識・理解・技能」①について「十分満足できる」状況(A)と評価した。

ただし、[言語についての知識・理解・技能]②については、「遺でんし」「ぼっしゅう」などについては漢字表記をして読みやすくすべきところかと考えられるが、ひらがな表記をしているところから[言語についての知識・理解・技能]②については「おおむね満足できる」状況(B)と評価した。

図4の生徒は、[言語についての知識・理解・技能]①②ともに、「おおむね満足できる」状況(B)と評価した。

■「努力を要する」状況(C)と評価となりそうな生徒への対応

本時の学習において、「努力を要する」状況(C)となりそうな生徒に対しては、適切な用語を示して書かせるようにし、ほとんどの生徒を「おおむね満足できる」状況(B)とするように支援を行った。

■ 観点別評価結果の総括

[言語についての知識・理解・技能] ①②については、第3時で下書きを書く場面と、第5時の学習を終えて回収したワークシート⑤の記述によって評価した。

これらの評価結果を総括する際に、2つの評価結果が異なる場合には、1頁の表1に記したように、以下の①、②のようにした。

- ① 第3時と第5時の評価結果が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」となる場合は、生徒の学習の深まりや向上を考慮して、第5時の結果を単元の評価とする。
- ② 第3時と第5時の評価結果が順に「A, C」「C, A」の場合は、いずれの場合においても「B」とする。

第3時と第5時は同様な活動であるが、第5時では、第4時でのグループ内で下書きを読み合い、意見交流をする活動を基にして清書を行うので、第5時における評価結果をより重視することとした。第3時においては、記録に残す評価として位置付けているが、同時に、生徒の状況に応じて適切な指導・支援を行うことで、第5時の学習活動の充実につなげたいとの意図もある。

このように記録に残す評価を適切に位置付け、確実に評価を進めるとともに、単元を見通した形成的な評価とそれに基づく適切な指導を行っていくことが大切である。